西洋古版本印刷地の見分け方ガイド（3）

武者小路 信和
(大東文化大学文学部)

植字・組版慣行に基づいて印刷地・出版年代を推定する際のポイントとして、そのほかにどんなものがあるでしょうか。J.-J. ルソーの記述書誌の編纂者である J.-A.E. McEachern は、18 世紀後半のヨーロッパ大陸の書物を対象に以下のような点を指摘しています[1)]。ただし組織的な調査の結果としてではなく、長年にわたって 18 世紀の古版本を扱ってきた経験に基づいたものです。

・「ロング・エス」の使用の有無：

18 世紀後半の「ロング・エス」から通常の「s」への移行期において、「ロング・エス」の有無は出版時期の推定の手がかりとして、また出版時期が判明している場合には、印刷地の推定の手がかりとして重要である。

・折記号の位置（1）：印刷される位置がページの中央であるか右寄りであるか

18 世紀後半に、page-catchwords（キャッチワードを毎ページに印刷する）が徐々に廃れ、quire-catchwords（折り丁を単位に、折り丁の最後の裏ページだけに印刷する）への移行が認められる。page-catchwords を採用した場合、キャッチワードが右端に印刷されるため折記号は真ん中に印刷された。他方 quire-catchwords の場合にはキャッチワードと折記号とが一緒に印刷されることはないので、折記号は右寄りに印刷された。このことから quire-

catchwords でありながら折記号が真ん中に印刷されている場合、その印刷所が最近 page-catchwords の使用をやめたことを示唆している。

・折記号の位置（2）：本文と脚注の両方が印刷されているページにおいて、印刷される位置がページの最後であるか、本文と脚注との間であるか

本文と脚注との間に折り記号を印刷する慣行は、page-catchwords（および脚注のキャッチワード）と結びついている。

・キャッチワード（1）：本文は quire-catchwords、脚注は page-catchwords

本文では quire-catchwords が使用されていながら、脚注では page-catchwords が使用されている場合、その印刷所が最近 page-catchwords の使用をやめたと推定される。

・キャッチワード（2）：キャッチワードの長さ

page-catchwords の場合、キャッチワードは短い傾向にあり、しばしば単語の一音節か二音節にハイフンを付けて使用した。他方、quire-catchwords の場合、キャッチワードは単語全体を使用する傾向にある。quire-catchwords でありながらキャッチワードに単語の一音節しか使用していないならば、その印刷所が最近 page-catchwords の使用から quire-catchwords の使用へ移行したことを示唆している。

以上、これまで3回にわたって、ヨーロッパの古版本を対象に、書物そのもののなかに印刷されて残されている植字・組版慣行の痕跡に注目することによって、印刷地・出版年代を推定する方法について解説してきました。この方法の一番のメリットは、書誌学や出版史などの専門的な知識を必要とせず、また著者や出版者の記録などの外的な証拠を見つけたり、調べたりする必要がなく、判断を必要とする書物（画像を含む）さえ目の前にあればそれで推定できることにあります。

しかし、この方法はあくまでも「推定」する際の手がかりであって、いくらこの証拠を積み上げてみても、「確定」できるわけではありません。実際に、可能な限り確定が必要とされる場合には[2)]、隔靴掻痒

の感が否めないようです。たとえばJ.J. Rousseauの著作は人気があるために海賊版が数多く出版されただけでなく、危険思想として弾圧される可能性があるために正規の出版者であっても正しい出版事項を匿したり、偽ったりして出版しました。McEarchernは、こうした複雑に入り組んだ出版事情をもつ著者の記述書誌の編纂者の立場から、Sayceの方法をある程度評価し参考にはするものの、十分に絞りきることができないこともあって、厳しい意見も述べています。

> 植字慣行を基礎に記述対象となった各版の出版地を同定するための試みがなされた。大部分のケースにおいて、さまざまな理由からこの試みは不成功であることが証明された。多くの場合、多様な植字慣行は軽々になんらかの確定的な結論を引き出すことができないような矛盾する証拠を提供した。さらに18世紀後半においては、植字慣行の地域的な違い、とくに同一国内でのそれは以前の書物に比べかなり目立たないものになっていた[3)]。

植字・組版慣行に完全には頼ることができない理由として、たとえば次のようなことがあげられます。

①国外マーケットに合わせるため

書物の国際的な取引が盛んになり、外国の読者を主な対象とする出版者が現れて、そのなかには意図的に読者に合わせた外国風の姿の書物をつくることがありました。たとえば18世紀イギリスにおいてフランスの本をフランス語のままリプリントすることが行われましたが、その際イギリスでの販売はかなり限られていて、作る際にはフランス市場に合わせた慎重な努力、つまりフランスのオリジナルに正確に似せたレイアウトにし、イギリスの本を特徴づけるプレスフィギュアとページキャッチワードを採用していなかったという[4)]。

②取り締まりなどを怖れて、偽装することがある

歴史的にみて、政治的・宗教的な権力は自分達にとって有害となる表現を弾圧することが多く、多くの国で出版・表現の自由が成立していませんでした。実際に権力による取り締まりや裁判の

過程において、印刷物を調べて印刷者・出版者を割り出すことが行われました[5)]。そのため、別の国・地域の出版物であることを装うことが行われており、その偽装の一つとして植字・組版慣行の違いが逆に利用されることがありました。たとえばフランスにおける地下印刷の中心地の一つであるRouenの印刷業者は、外国の出版物を装うために極めてしばしば少なくともキャッチワードに関してイギリスの慣行に従ったという[4)]。

確かに植字・組版慣行による印刷地・出版年代の推定方法は、このような限界をもっています。しかし、その限界を知ったうえで使用すれば、西洋古版本を扱う際に役立つことでしょう。たとえば古版本を購入する際あるいは本文の信頼性を判断する際など、それが真正な版であるのか海賊版であるのか、そのおおよその可能性の検討をつけることができます。さらに必要であれば、書誌類や書誌学文献などを利用して詳しく調査すればよいでしょう。

(完)

【注】

1) J.-A.E. McEachern. "Eighteenth-Century Continental Books: Some Problems of Bibliographical Description." *TEXT: Transactions of the Society for Textual Scholarship.* 3:355-366(1987) 同氏は、とくにヨーロッパ大陸の書物対象にした記述書誌では、このような点を記録することによって情報を蓄積していくことが重要であると指摘している。

2) 出版者・印刷者を特定する方法の概要については、David Smith. "False Imprints: Identifying the Publishers of Surreptitious French Works of the Eighteenth Century." *Cultura: Revista de História e Teoria das Ideias.* 2 série 9:207-220(1997) を参照。そのなかの手法の一つである装飾大文字やオーナメントから特定している具体例として、Dennis E. Rhodes. *Silent Printers: Anonymous Printing at Venice in the Sixteenth Century.* London: British Library, 1995. (The British Library Studies in the History of the Book) がある。

3) Jo-Ann E. McEachern. *Bibliography of the writings of Jean Jacques Rousseau to 1800. 2: Emile, ou de l'éducation.* Oxford: Voltaire Foundation, Taylor Institution, 1989. p,12-13.

4) Giles Barber. "Catchwords and press figures at home and abroad." Book Collector. 9(3):301-307 (Autumn 1960)

5) たとえば宮下志朗「自由な精神と強い判断力を守り通すこと—出版人クリストフ・プランタンの生き方(2)」『UP』(東京大学出版会) (386):30-35(2004.12)、C.J. Mitchell. "Quotation Marks, National Compositorial Habits and False Imprints." *Library*. 6th ser. 5(4):359(1983.12) を参照。